

未来に継ぐアカタン砂防エコミュージアム

田中 保士

田倉川と暮らしの会

1. 記憶の進化

活動領域は、福井県南条郡南越前町古木地区です。北陸自動車道今庄 IC から約 7km、JR 今庄駅からも 7km に位置する戸数 50 戸の山村集落です。1895 年(明治 28 年)から 3 年続けて豪雨災害に見舞われ、地域に大きな被害をもたらしました。また 1897 年には田倉川の枝川赤谷川上流大平で土砂崩壊発生、アカタン(赤谷)は山津波(土石流)で埋め尽くされました。その後この自然災害は、むらみたちの記憶からすっかり忘れ去れたとのことでした。1974 年田倉小学校の飯田義基さんは、災害を体験した当時 4 歳だった歌門宇太郎さんから記憶を収集編集し、小学校副読本「私たちの郷土宅良の里」に遺してくれました。

「・・・卯の刻の雨は巳で晴れる。八時ごろ雨が降り出して上空から黒雲が舞い下って、向かい山の上から下地面までが黒雲で山の姿が見えないほどになった。雨は空から手桶で水を流すほどの大降りであった。・・・午後、雨は止んだものの村中は大混乱と驚苦であった。谷川の橋々は流出し、奥からの流木が清助前の橋に引っ掛かり塞ぎ止められて氾濫した。中道通りに流れ込み低い屋敷二十戸ほどが床下浸水の憂き目にあった。・・・驚苦と混乱の中、軒下の焚き木は雨にぬれ、囲炉裏の火が燃えなかったため、午後三時になっても昼食が食べられなかった人が多くいた。

・・・権次郎、佐助、嘉十郎、喜三郎、駒吉の家へ大川の濁流が打ち寄せて危険な状態になったので、村人が山

から立木を刈り出して、川へ枝木を流して水を刎ねて警戒した。晩方になっても大川は減水に到らなかったので交代で警戒に当たり夜半まで続けた。食事は村が炊き出しをして清治郎、喜三郎、駒吉、彦三郎の家族と警戒に当たった村人に握り飯を与えて当時をしのいだ。・・・」。

アカタンの山津波の記憶には「・・・谷道はいけないので山伝に行ったそうですが、アカタン中ほどまで行ったとき、奥の方からゴウゴウ音を立てて山あいいっぱい濁りに押し流されて出て来る山津波に出くわしました。直径 30センチ以上もあるような大きな立木が、草がなびくように泥土と一緒に押し流されてくるのです。自分が立っている足元まで地割れしてくるような気がしたので、その人は一目散に木やぶの中を駆け抜けて村の人たちに急を告げに帰りました。あんな大きな山が流れてくるんじゃ・・・とても古木は助からん、どっかで大海ができるぞ・・・」

当時副読本を読んだ少年たちは、宇太郎少年の息づかいが聞こえる強い印象だったと思います。

以来再び記憶は薄れていったそうです。とくに 1899 年から始まった砂防工事のことなどは、記憶と一緒にほとんどが藪に覆われてしまいました。

1998 年「アカタンから先人たちの暮らしと川を学ぶ」をコンセプトに田倉川と暮らしの会が誕生、伊藤喜右エ門会長と 7 人の住民が活動を始めました。アカタン口にある古い土造りのえん堤が九号と呼ばれていること、私の母の記憶で、子供のころアカタンに幾つかの石積みとドブ(池)があつてよく遊んだという話も糸口になりました。砂防の専門家澤田豊明さんと数名の都市住民が加

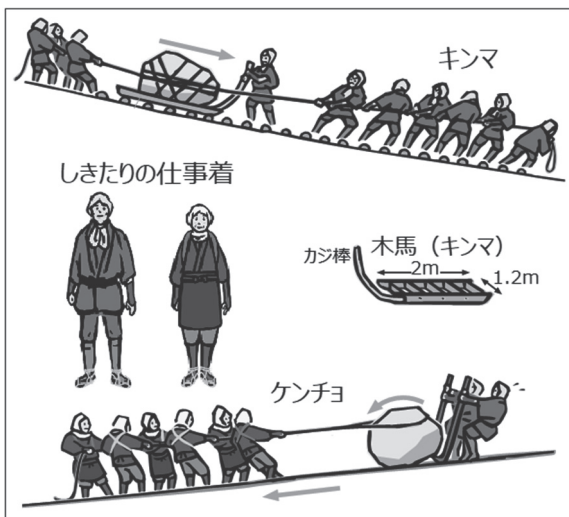
わり番号をさかのぼり、藪を切りはらい調査を始めました。まもなく石積えん堤は明治に造られた歴史的な砂防遺産であることが分かり、大張り切りで調査が進み1年で1号砂防えん堤まで探し当てました。100年ぶりに逞しく美しい姿の明治の石積砂防えん堤群を登場させました。

アカタンの石積砂防えん堤は全国で類を見ない独特なことから、この快挙は新聞で報道され注目されました。それは集落の誇る遺産として一層熱意みなぎる住民活動となりました。自分のむらは自分たちで守るという先人たちの良きむら社会を知ることとなり、地域の人、都市の人に伝え継いで行きたいと意気込みました。

2. 故老の記憶面制作

住民の面谷啓一さんの得意技は古文書解読、権八實さんは盆唄の作詞と唄いで手名人で、唯一の炭焼きを続けています。伊藤・面谷・権八さんらは歌門宇太郎、面谷六兵衛の手記や言い伝えなど記憶の収集と編集に取り組みました。

また、集落で土建業を営む大塚由次さんの祖父與士太郎さん宅に、当時災害復旧工事監督の内務省職員が宿泊していたことから、石積工事の貴重な詳しい記憶を伝え聞くことができました。この記憶が事実を裏付ける材料になりました。



地域には野石を積む石工さんが高齢ながら健在でした。野村義一さん、玉村定行さん、妙珍政孝さんそして伊藤武男さんらは石工親方制度の中で代々技を継承してきました。本来なら後継者を指導するのですが、その後野面石積みからコンクリートブロックに代わったことで現役を退いていました。石工さんから記憶を掘り起こし、地域特有の石積み方法を描きました。仕上げは農学出身のイラストデザイナー三宅剛さんに依頼しました。この作業は2006年発行のアカタン砂防エコミュージアムマップに掲載されました。

3. 歴史的砂防遺産

アカタン砂防えん堤は、どれを見ても自然の摂理にかなった素直で効率の良い造りです。石材はアカタンの自然が与えた良質の野石を使っています。石工たちは大きな野石の面と対話し、吟味しながら積み上げていたと思います。地域の伝統的な石工の技と、携わった村人たちの気立てが融合した造形の感性に魅了されます。人と自然が順応した美しさ、実用の美しさを感じます。人工的な材料で合理的に造られた構造物とちがって、年月を経るごとに美しさが増していきます。アカタンの砂防えん堤は、災害の思いを先人たちが私たちのために、未来の人たちのために願いをかけて築いたという価値観を私たちは共有しています。そのことが励みになり、えん堤・林道・小途の草刈りや補修作業を途切れることなく続けています。

4. アカタン砂防エコミュージアム

まれに見る豪雨と土砂災害の体験、住民総出で復旧させた砂防遺産群、そしてさまざまな農山村の暮らしを古老から記憶収集し、現地を調査研究してきました。それらをそのままの良い状態で守りながら伝え継いでいく活動を続けています。アカタン「まるごとミュージアム」から始ま

った活動は「フィールドミュージアム」そして「エコミュージアム」と進展してきました。

住民が農地を提供した南越前町施設「リトリートたくら」がアカタン口にあります。エコミュージアムに好都合のコア施設、活動のプラットフォームとして利用しています。館内には広い交流ホールがあり、活動の案内・調査報告・写真などを常設展示しています。研修室、レストランも完備され、別棟で宿泊施設なども備わっています。各施設は南越前町、田倉川と赤谷川は福井県が管理することから行政との連携協力はいたって良好です。



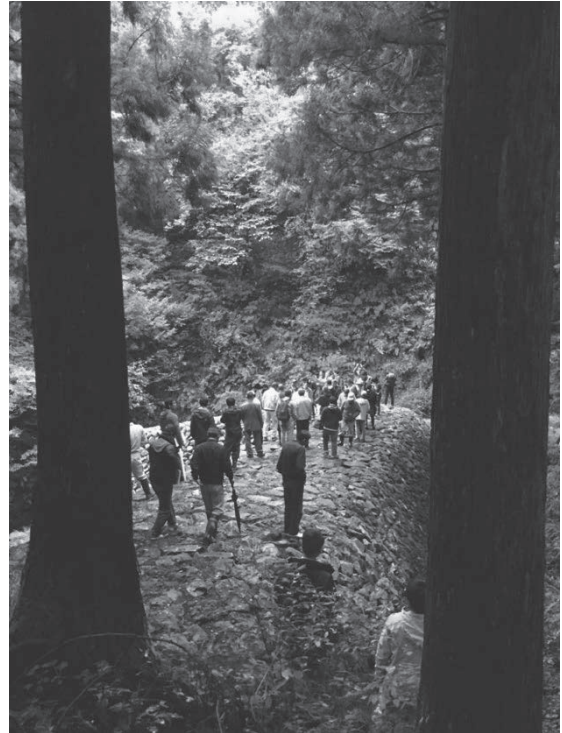
コア施設のリトリートたくらとキャンプサイト

面谷さん、権八さんそして伊藤会長は、訪問者が予告なしに来られてもその度に仕事を止めて懇切に案内解説しています。地域の学校とも良好なつながりを持ち、学習に生かされています。「山村の年寄は何でも知っている、何でもできる、そしてとても陽気で元気だ」という印象が魅力で、少年たちから人気を得ています。

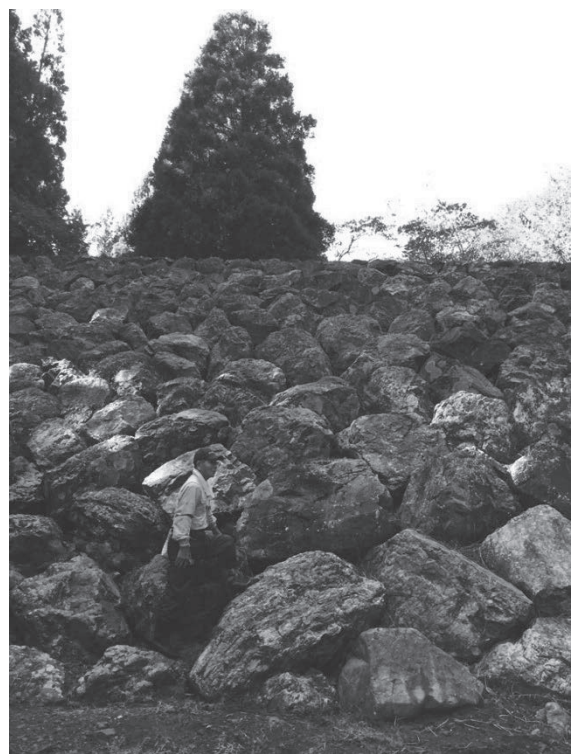


先人たちの思いを未来の世代に語り伝える面谷さん

田倉川はアカタン砂防と集落が一体となった川に学ぶ体験活動の良好な常設フィールドになっています。RAC川に学ぶ体験活動協議会・日野川流域交流会と連携した子どもの水辺安全講座、初級指導者育成講座、カヤック体験など川活動を頻繁に開催しています。



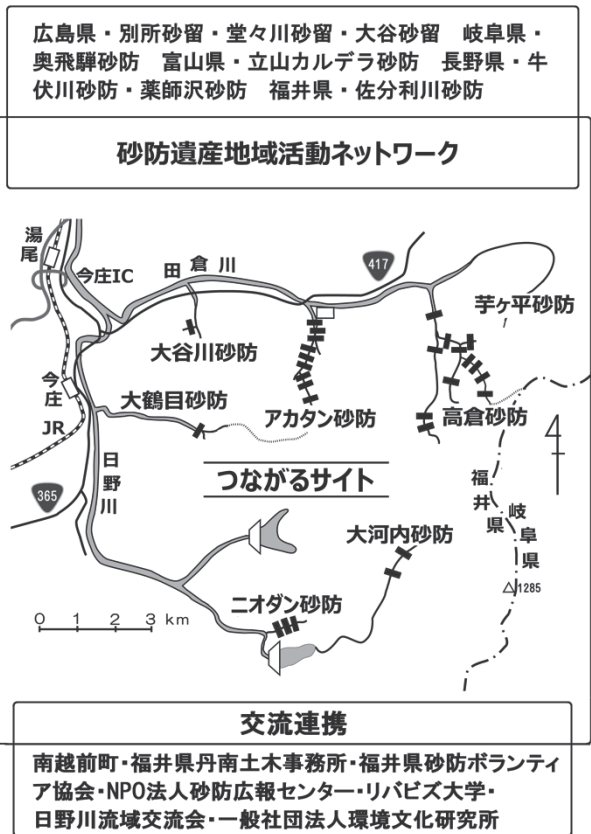
サテライト5：類ない気品を感じるえん堤として人気



サテライト6：古いが常に美しく新しい使命を感じる



硬いケヤキの古材で夜なべして彫った手仕事の味のある標識。アカタンの森に調和し、訪問者に住民の熱意やゆくもりを伝えてきた。現在は看板会社製に替えられた。



アカタンと同時期に今庄山地一帯が豪雨土砂災害にあり同じように砂防工事が行われました。各集落に呼び掛け歴史的砂防遺産を調査し藪に覆われた石積砂防えん堤を探し出しました。それらをつなぐ活動を試みていますがまだ先のことになります。一方全国の活動団体との交流は活発で、各地持ち回りの全国大会シンポジウムなど開催しています。フランスの砂防遺産群(Torrent du Manivalなど)に興味があり、将来交流してみたい想いがあります。これ

らの活動の支えになっているのが地方自治体や専門機関研究団体です。



5. 明日から

活動は 21 年続いています。最初参加住民は 8 名ですが高齢者が多かったこともあって現在半数になりました。山村集落の気風なのか直接参加しなくても大半の支持は感じ取れます。私たちは宇太郎少年の記憶を確かに未来へ継ぐことができたことを喜んでいて、仕合せなことに都市住民や全国の仲間そして民間研究所の支えを得ながら持続していきます。明日からは住民の暮らしのスタイルに合わせて知恵をだしていきたい。まずはコアミュージアムの展示案内を魅力的なおしゃれな空間にしたい。ときめくコンテンツで SNS の活用を展開していきたい。住民・訪れる人・サポーターのいい関係を高めていきたい。地域に根付いたビジネスも考えてみたい。そのために Jecoms との友好的交流を通して、科学的にスキルアップしていきたいとときめかせています。